
僕が私で彼女が彼で

skyofnet

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が私で彼女が彼で

【Nコード】

N7685K

【作者名】

skyofnet

【あらすじ】

『雲の学園生徒会！！』のスピノフ作品ではないですが、その世界での物語です。同じ雲の学園を舞台に彼は彼の、彼女は彼女の波乱に満ちた生活を書きます。

主人公は上条雄介

ヒロインは下尾比雌

気分的には恋愛をずいずい入れたいと思ってます。

本作は本編とは違い、バトルメインではありませんのであしからず…

雲の学園生徒会のメンバーもゲスト出演します。

ぶっちゃけ不安です。

恋愛物書いたこと無いんで…

何はどうかあれスタート!!!

01 はじめに

『雲の学園生徒会!!!』のスピノフ作品ではないですが、その世界での物語です。

同じ雲の学園を舞台に彼は彼の、彼女は彼女の波乱に満ちた生活を書きます。

主人公は上条雄介

ヒロインは下尾比雌

気分的には恋愛をずいずい入れたいと思ってます。

本作は本編とは違い、バトルメインではありませんのであしからず…

雲の学園生徒会のメンバーもゲスト出演します。

ぶっちゃけ不安です。

恋愛物書いたこと無いんで…

何はどうあれスタート!!!

02 僕と彼女の関係

雲の上学園。

ここは超がつくほどのお金持ち学校でもあり、超エリート高校。学校敷地は迷子になるくらい広く、高校中学小学校が全て隣接した場所である。

その高等部の2年G組にて…

「なあ上条」

坊主に眼鏡をかけた男が問いかけた。
それに男は反応する。

「何？」

「お前声変わりしないの？」

「うっさいな！ほっとけ！」

男の声は通常の男性よりも高く、アルト・ソプラノで歌えるのではないかというくらい高い。

「あ、それとホイ。」

「これは…」

坊主が出したのは、手紙であった。

「上条宛てに先輩からお誘いのお手紙」

“上条”は肩を落とした。

「だからさ、矢部さ、何でお前はいつも僕の郵便ポストになってるんだよ？」

「だってさ、お前かわいいとかで、先輩から受けがいいからよくラブレターとかお誘い受けるだろ？おれがその仲介となって、その人とお近づきになる！正に頭脳プレイ！」

「僕を餌にして……。だいたい僕は！」

上条は何かを言おうとすると、教室のドアが開かれ、上条の名前が呼ばれた。

「ん？」

ドアで上条を呼んでいたのは、かわいいより綺麗。綺麗よりかわいいと言える容姿をした女性であった。

「上条、ちょっと来て。」

「下緒。わかった。じゃあ、矢部。断つといて」

「ビュービュー、彼女のご到着！」

この上条と下緒は恋人同士であった。

かわいいと言われる、上条。

かっこいいと言われる、下緒。

このベクトルが逆カップルは校内でも有名であった。

「ねえ上条。」

この下緒は声のトーンも低く、同姓からラブレターなどを貰うこともしばしば。

「ちょっと付き合っつて。」

「どうしたんだよ?」

「私が付き合っつている人がいるって説明してもなっつくしてくれない人がいるからさ。」

どうやら上条が恋人であることを見せ、あきらめてもらいたいらしい。

別にこれが初めてのことでないので承諾した。

下緒が案内すると、途中

「いた!」

「あ、ごめん!」

上条は女の子と衝突した。

東海林桜であった。

「東海林か。」

「お、上条! 識見なかった?」

「中嶋か?」

「そうそう! あの馬鹿うちのサボりを茜さんにチクって!」

桜をよく見ると、ほっぺたがはれていた。

「上条。昼休み終わる。」

「ああ。悪い。東海林、中嶋は見えないぜ。」

「サンクス!」

話が終わり、上条は下緒と歩き出す。

下緒を見ると、特に女と話していても興味がなさそうな感じであった。
上条が女子と話していても、これといって嫉妬などをしないのはいつものことである。

それは上条も同じであるが。

非常階段

「三島さん。」

下緒が女子に声をかける。

「あ、下緒さん。あの…」

「さっきの話、私の彼氏の上条。」

紹介されて、とりあえず軽く会釈する。

「…本当に彼氏なんですか？」

三島は目がマジであった。

「ああ、下緒は僕の彼女だ。」

「…信じられない。私は本気で下緒さんを…」

「じゃ、そういうわけだから、上条、いこつ」

下緒は冷たく接した。

三島は泣いてはいなかったが、下を向いていた。

（やれやれ。）

よくあることだ。

逆のときだってある。

先輩に告白されて、下緒を連れて行ってあきらめさせる。

いつの日からか、僕と下緒はお互いその為に付き合っようになっ
てしまっていた。

そもそも付き合い始めたきっかけは…三ヶ月前

「よし、このスゴロクで負けたら罰ゲームな！」

上条はクラスでありがちな罰ゲーム付きのゲームをしていた。

そして、その時運悪く、上条が負けた。

「では、上条よ。わしの変わりにオナゴに告白を！」

「浦島は振られまくりだから、たまには人が振られるのを見たいっ
てことだな」

冷静に識が分析する。

「では…あのオナゴじゃあ…ツンツンしとるからきつと振られるじ
やろつて…！」

指名したのは下緒だった。

その5分前

「じゃあ、この勝負に負けたら付き合ってくださいって告白ね！」
と、いうことで下緒も適当に告白する相手を探していた。

(アイツは…たしか上条？あいつでいいか。彼女いるだろうし。)

二人は目が合い、

「付き合ってください。」

((^!?))

周りに人もいたため、そのまま周囲公認のカップルとなった。

そして帰りも別々であった。

上条家

(ふう。さて、)

上条は家に帰るなり、時計を見た。
時刻は昼3時。

今から出かけるのか、服を着替え始めた。

「ふんふん」

着替え始めた。

言い忘れていたが、上条雄介には変わった趣味があった。

女装である

続く。

03 僕と女装と学園祭

僕が女装に興味を持ったのには理由があった。

あれは、去年、つまり一年生の文化祭…

僕はクラス内で、出し物を決めていた

「っということ、メイド喫茶をやりませう。」

男子からは歓喜の声。

女子からは文句の声が聞こえていた。

文化祭の出し物の候補が複数あったので、投票という手段で決めていた。

そこで、密かに男子はメールでメイド喫茶に票を入れるよう皆に言っていた。

僕のクラスは男子の方がわずかに多い。

そのこともあり、あっという間にメイド喫茶をやることに決まった。

「男子グルになったでしょ！」

メイド喫茶の票と男子の数が一致してることから、女性の一人が力ククリを見破

り抗議してきた。

男子としては、女子メインのこの企画のため、極力対立は避けたい。そこで、当時間も同じくクラスだった矢部が立ち上がった。

「まあまあ、女子諸君。俺から提案がある。ちょっとこちらへ…」

矢部はクラスの女子を教室から連れ出した。

そして一分後

「仕方ないわね。メイン喫茶を認めていいわ！ただし矢部の言った交換条件を果たすことが前提よ！」

ちなみに今話したのは、女子の代表格にあたる佐々木翔子“E”カ
ツプ。

「男に二言はない！任せておけ！」

男子は矢部が何を条件に女子を納得させたのか、誰にもわからなかった。

「つーわけで、上条ちゃん。女装してくり」

「はああ!？」

矢部に非常階段に呼び出され、何の話しかと思ったら、女装の頼みだった。

「冗談じゃない！どうして僕が!？」
「安心しろ。俺も中嶋も女装する。」

そこで、気づいた。

矢部が女子に何を言ったのか。

「矢部…。お前はこれを条件に出したのか？」

「やん ばれちゃった？」

「ふつつつざけんな!!」

こんな理不尽あるかとはかりに怒鳴った。

「人の身体と心を何勝手に提供してんだよ!」

「だってよく翔子ちゃんEカップのメイド姿を見るには必要な犠牲なんだよ。」

僕は不意にも佐々木のメイド姿を想像して生唾を飲んだ。

「いや、だからって!」

「なあ？上条。お前は俺にドデカイ借りがあったよな？」

矢部は急に鋭い目付きになった。

「中学の卒業試験。勉強教えたのは誰だっけ？」

「うっ!」

卒業試験は一定以上の点数をとらないと雲の上学園高等部に進学できないテストである。

当時、僕は成績のよかった矢部に勉強を教えてもらい、ギリギリ一

定点数をとれた。

それを出されると、頭が上がらない。

「わ、わかったよ。やればいいんだろ。」

しぶしぶ了承してしまった。

まあ矢部も中嶋もやるのだから、マシと言えばマシであろうか。

そして、文化祭当日

「キヤー！！わかしい〜！」

僕のカツラ付きの衣装は好評価だった。

「中嶋く、なんでアイツだけ女に人気なんだ？」

「知るか。それとお前は文化祭終わったら、後夜祭の生け贄にする。」

僕はそのまま、文化祭で接客をした。

元々僕は声が高いこともあって、女装してることはバレなかった。

中嶋と矢部は色物メイドとして見られていた。

「休憩に行つていいよ。せっかくだから、女装したまま行けば？」

佐々木が、休憩の時間をくれた。

僕も接客をしていたら、自分の女装が次第に楽しくなってきたため、遊び感覚で

、休憩中も女装していた。

中嶋と休憩が重なったので、二人でぶらりと出し物見学をした。

「中嶋が女連れで歩いてるぞ！」

「あのかわいい子誰だ!？」

どうやら僕と中嶋はカップルに見えるらしい。

「中嶋か？」

目の前には“不良”で有名な西園寺七海がいた。

「よお、西園寺。」

「彼女いたのか？」

ここで、中嶋は違つと言えただろう。しかし…

「彼女だ。」

「っ!？」

僕はあまりの衝撃にポカポカ叩く。

端から見たら、その光景はいちやついてるように見えたのだろう。

西園寺は舌打ちし、歩いていった。

「何言ってるの!？」

「文化祭限定のジョークだ。」

実は、この時、満更でもない気分だった。

こうして、文化祭は終わった。

帰り際、佐々木からメイド服とカツラ色違い茶髪をもらった。

僕は、文化祭で“あるいけない感情”が芽生え始めていた。

家で女装した自分を見た。

(か…かわいいかな?)

笑顔で、クルクル回る。

そして、手が器用な僕は、簡単な服を作った。
女物を。

(…)

(彼女…かあ…)

(これで街に出たら…)

こうして、僕は

週に数回帰ったら、女装して街を歩く

女装に目覚めた。

04 私と男装と雪組

小学生6年生時代

「付き合ってください！」

「あの私女ですよ？」

私はどうしてか、クラスの女の子に体育館裏に呼び出された。人に言いにくい恋の相談か？などと勘ぐりした私を誰が責められよう。

「あの、女同士でしょ？」

「それでも比雌ちゃんがかっこよくて、私好きになっちゃって」

“かっこいい”私はよくそういわれる。

親戚からも会うたび“会うたびかっこよくなるね”などといわれる。

「でも…ごめん。」

それが小学生のときの大きな思い出である。

中学生時代。

告白される回数が増えた。

「桜、助けて」

「どっただ？」

「女からしかモテないんだけど…」

「あゝそういえば、この前も女の先輩に呼び出しくらってたね。」

「まあ…あれもそうだけど…」

数週間前、

私は桜と友達になった。

そして、先輩の呼び出しで体育館裏に行ったとき、

「まてい！」

体育館の上に一人の影。

「天よ地よ水よ火よ！」

「なんだデメエ！」

たまらず先輩はその人物にどなりつけた。

「貴様らに名乗る名はない！！！」

そして、先輩にとび蹴り。

あとから聞いたなら、喝上げかと思っただらしい。

それで救助にきたようだ。

「あれはまずかったね。お礼参りにこられちゃったよ」
「
「だろっな。おっと」

最近油断すると男口調になる。

これも私って本当は男なんじゃないかって馬鹿みたいなことを考えたせいだ。

「はあ……」

「まあ元気だしなよ」

桜が手渡したのは、チケットであった。

「何これ？」

「雪組歌劇団。」

「いや何それ？」

「男装して歌って踊るミュージカルのようなもののチケット。うちこの日いけないからあげる。」

「うーん、わかった。貰っておく。」

雪組の舞台をみにいった。

正直最初は興味はなく、暇潰し程度に観ていた。

だが、彼らの男装姿を私はかっこいいと思っていた。

私は、今までかっこいいと言われて嫌な気分はしなかった。

彼らの演技を観て、正しいかは関係ない、後押しされた気分になり、自分を思い

っきり出すことにした。

私は家に帰るなり、買ってきたメイク道具、カツラ、服を計画通り来てみた。

（ビジュアル系…もどき…かな？）

私は男装した。

（けっこうイケてる？）

私は家を出て、街を歩いた。

バレたら一生の恥じになるとは考えていなかった。

それ以上に、今の私を試したい気持ちがあつた。

街に出たら、バレるところか、遠くで女子高生が私のことを噂していたのが聞こえた。

えた。

「あれ、ちょーやばくない!？」

「声かけなよおー」

私の男装は成功したようだ。

この一件で、私は、男装して街に出かける趣味を持ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7685k/>

僕が私で彼女が彼で

2010年10月10日00時32分発行